明治期の人称代名詞の表記と待遇価値との相関関係の考察

－家庭小説『女夫波』を中心に－

李希貞*
knou187@hanmail.net
三浦昌代**
m3masayo@hanmail.net

<目次>

1. はじめに
2. 先行研究および研究目的
3. 一人称の漢字表記と振り仮名による待遇表現
   3.1 漢字表記「私」の場合
   3.2 漢字表記「乃公」の場合
4. 二人称「あなた」の漢字表記と待遇表現
   4.1 漢字表記「所天」の場合
   4.2 漢字表記「貴下」の場合
   4.3 漢字表記「貴女」の場合
   4.4 漢字表記「貴方」の場合
   4.5 その他の漢字表記の場合
5. おわりに

主題語: 明治期(the Meiji era)、人称代名詞(personal pronoun)、漢字表記(chinese character notation)、振り仮名(Kana above Kanji to show the pronunciation)、待遇価値(the level of treatment)

1. はじめに

明治期は文明開化以後、外国語の翻訳による新漢語が大量に誕生した時期であり、言語体系においても江戸語から東京語へと移りゆく過程的な要素を残している。待遇表現の変化もその一つの要素であろうし、漢語(漢字表記)の使用法においても現代の日本語には見られない表現が多く現れる時期でもある。

本稿では明治期の多様な表現法の中で、漢字表記の多様性とその振り仮名の関係を待遇表現を通して考察しようと思う。漢字表記が多様に登場してしている理由は何か、どんな意図でこのような漢字の表記法が使用されたかを明らかにすることは、明治期の文字表記

* 柳韓大學校 産業日語科 講師
** 東明大學校 自律專攻學部 助教授, 交信著者

を理解する際において何よりも重要であると考えられるからである。

2. 先行研究および研究目的

近代日本語の待遇表現の研究は房(2010)によって詳しい。人称代名詞を待遇の観点からとらえようとする場合、「相手のありかた」による使い分けの検討も重要であるが、言語行動が行われる「場面」状況から検討する必要があるとして明治期の人称代名詞「わたくし」と「わたし」のもちいられ方を考察している。「相手のありかた」では①上下関係、②性別関係、③親疎関係の三つ、「場面」では①改まり程度によって(公的・私的)、②話題や状況によって(A場面：「依頼・要求」「謝罪」「断り」「相談・交渉」、B場面：「伝達」「雑談・おしゃべり」、C場面：「けんか」「軽蔑」)を示しており、「わたくし」は基本的に「A場面」の改まった場面で現れ、「わたし」は改まりの要求をされないB場面での使用が多いとし、使用の領域がほぼ決っているとしている。(房(2010:144~155))

またソン(2011)では、明治中期の落語の速記資料を対象に一、二人称代名詞についてその対応関係や文末表現の待遇表現の観点から考察している。その中で二人称の「あなた」に対応する一人称「わたくし、わたし」の待遇表現については①下位者が上位者に対する最高の敬意、②同等の立場では自身の品位や教養を表すため、上位層と庶民層で普く使用、③上位者が下位者に対して使用する場合は叱責を断固として表現したい時と相手の地位に関係なく自身の品位を表すためとし、文末表現では「ー御座います」「ーです/ます」であるとしている。(ソン(2011:110))

これらのように明治期の人称代名詞と待遇表現の関係については、性差や社会階級や年齢の相違の観点からの考察、さらに場面や状況などの視点からの研究まで幅広くなされてきているが、人称代名詞の漢字表記の違いに焦点を当てた研究は少ない。そこで本稿ではこれらの研究の成果をふまえ、さらに人称代名詞の漢字表記の違いに注目し、その振り仮名との関係、さらに待遇表現との対応関係を通して考察を進めていく。

3. 一人称の漢字表記と振り仮名による待遇表現

明治中期以降に流行した女性向けの通俗小説といわれる家庭小説で、1904年(明治37)「萬朝報」[1]に掲載された『女夫波(めおとなみ)』(田口掬汀)[2]の作品中の一人称代名詞について、その漢字表記に焦点をあて振り仮名との関係を待遇表現との対応を通して考察する。

『女夫波』は政界で働く夫が海外出張している二年間の出来事を通して、残された妻と義理の姉との葛藤を描いた小説である。登場人物の数は多くなく、その人間関係は比較的単純であるため待遇価値について考察しやすいと考える。

3.1 漢字表記「私」の場合

3.1.1 振り仮名「わたし」

まず、一番多く使用されている一人称は「わたし」であり、その漢字表記の「私」を見てみる。

(1)『ですから私(わたし)は及ぶ丈(だ)け所天(あなた)のお力になりたいと……』(p.243上、妻→夫)

(2)『融さんこそ私(わたし)を舁(かつ)ぐのでせう』(中略)『お前さんこそ私を愕(おどろ)かせて笑はふと云うのでせう』(p.244下、姉→弟)

(3)『あゝ然(さ)うしませう、それに私(わたし)も話したい事があるんだし。ほゝほ、もう貴女(あなた)に舁(かつ)がれて仕舞つてよ』(p.283上、俊子→美津子(友人)

(4)『然(そ)うでしたか、併(しか)しお嬢様(ぢやうさん)！私(わたし)は貴女(あなた)の御無事なのを拝見しますと、寧(むし)ろ悲しく思ふのです』(p.356上、融(男主人公)→富美子(恩師の娘))

(5)『夫(それ)ぢゃ私(わたし)彼方(あつち)でお待申して居るからね、お帰宅(かへり)になつたら直(あ)ぐ進げるやうにしといてお呉れ』(p.268下、俊子→お竹(下女)

---

1) 「よろずちょうほう」と読む。1892年に朝報社から創刊された日刊新聞。1940年「東京毎夕新聞」に吸収され廃刊。

2) 田口掬汀(たぐちきくてい)1875年秋田県に生まれる。1903年(明治36年)朝報社に入社。1904年『萬朝報』に小説『女夫波』を連載、1905年『伯爵夫人』を連載、これらの家庭小説で人気作家となった。日本における本格的な映画製作が始まった1909年(明治42年)以降、これらは映画化されている。1943年満68歳没。

用例(1)をみると女性の主人公の俊子が自分の夫に対して、「私」の漢字表記に「わたし」の振り仮名が使用されている。夫に対しては「所天(あなた)」の表記と共に「お力になりたい」と謙譲表現が使用されている。用例(2)では、男性主人公の姉にあたる時子が弟に対して自分のことを「私」の漢字表記で「わたし」と言い、「融さん」「お前さん」と弟に対して「さん」と敬称を使っているが、述語部分は敬語表現は使用されておらず、続きの発話の中の「私」には振り仮名が付けられていない。用例(3)は俊子が友人の美津子に対して「私(わたし)」と言い、同等の関係であるため敬意の表現はない。また、用例(4)では、男性の主人公の植村融(とほる)が、恩師の娘の富美子(ふみこ)に対して「私(わたし)」を使用している。ここでは、「貴女(あなた)」と共起して「御無事」という敬意表現と「拝見する」という謙譲表現がなされている。用例(5)では俊子が下女に対する会話の中でも「私(わたし)」を使用している。このように「私」は男女を問わず、相手の身分や自分の立場に関係なく使用されていることが分かる。この作品には他にも振り仮名のない「私」という漢字表記が数多く現れているが、以上の考察から「わたし」と読んで差し支えないと言えよう。

3.1.2 振り仮名「わたくし」

次に、「私」という漢字表記に「わたくし」と振り仮名のある場合を見てみよう。

(6)『何も不可いの何のと言ふのぢゃないですが、私(わたくし)は先生の仰在るやうに感謝しなきゃならん理屈はないと思ふのです、(後略)』(p.252下、融→日頭(ひかみ)(恩師))

(7)『(前略)何時(いつ)でしたか忘れましたが、私(わたくし)岳父(あなた)の御面前で誓った事がありました。「私は決して官途には就かん、学問を以て身を立てます」と申し上げると、岳父(あなた)も五斗米(とべい)の為に膝を折るな……と仰在(おつしや)つて、色々励(はげ)まして下すつた事があつたですな』』(P.262下、融(婿)→橋見翁(義父))

(8)『お嬢様の事なんぞ、私(わたくし)何(なん)で根に持つてるもので御在(ござい)ませう、御遠慮なくお呼びなすつて戴き度う御在(ござい)ましたねえ』(p.341上、俊子→喜多子夫人(日頭の妻))

用例(6)では「私」の漢字表記に「わたくし」の振り仮名を使用している。これは自分より年上であり、父親代わりの日頭に対して主人公の融が敬意を表して自分のことを「わたくし」と言い、先生に対し「仰存る」という敬意表現を使用している。他に用例(7)では融が妻の父親に対しても「わたくし」を使用し、「岳父(あなた)」と共起して「御面前」「仰在る」「下さる」という敬意表現、「申し上げる」という謙譲表現がみられる。明治期の待遇的な違いについて房(2010:148)が「一人称代名詞「わたくし」と「わたし」は「相手のありかた」によって使い分けられており、その待遇価値の差が認められるのが基本的な性質である」としているように、ここからも話者である主人公の融が相手によって使い分けを行っていることが分かる。

さらに用例(8)は俊子が富美子の母である日頭の夫人に対して「わたくし」と言い、「御遠慮」「お呼びなさる」「御在る」と敬意、「戴く」と謙譲表現がなされている。このように「わたくし」が使用される時には、常に最上の敬意の待遇表現がなされていることがわかる。この用例(8)以前の文章中での俊子と喜多子夫人との会話では互いが漢字表記に振り仮名なしの「私」という一人称を使用しており、この用例(8)ともう一カ所だけが「私」の漢字に「わたくし」の振り仮名が付けられている。ここから、相手による使い分けだけではなく、房(2010:155)が「「わたくし」は基本的に「A場面」で現れている。すなわち、「依頼・要求」「謝罪」「相談」などの改まった場面が「わたくし」の主流をなしている」としているように、この場合、それまでの会話より改まっており「依頼・要求」の要素が含まれているため、「わたくし」の振り仮名を用いたと思われる。

3.1.3 振り仮名「あたし」

次に振り仮名「あたし」の場合を見てみる。

(9)『あゝ力になりますとも！加之(それに)私(あたし)、時子さんとも交情(なかよ)好くして居りますし、必(きつ)と及(だ)ぶ丈けの事をいたしますわ』(p.254上、富美子(娘)→日頭(父))

(10)『あゝ然うですとも、貴女(あなた)や私(あたし)は斯(か)ふ云ふ身分になつたから宜(い)いけれども、(後略)』(p.284、美津子(友人)→俊子)

(11)『私(あたし)、然(さ)う仰在(おつしや)つて戴くのを、楽しみにして辛抱(しんぼう)しました』(p.344下、俊子(妻)→融(夫))

用例(9)では娘が自分の父親の前で「あたし」と言い、父に対して「居る」や「いたす」の謙譲表現が使用されている。また用例(10)では女友達同士での会話の中で使用されている。用例(11)は2年ぶりに再会した夫に対して妻の俊子が「あたし」と言い、「仰在る」「戴く」と敬意と謙譲表現を使っている。このように「あたし」は女性が近い関係の相手に対して使う表現であることが分かる。

以上、「私」という漢字表記には振り仮名「わたし」「わたくし」「あたし」の3種の語形が現れる多語―表記である。「わたくし」においては常に目上に対する敬意または謙譲表現と共に使用されていることが分かる。

3.2 漢字表記『乃公』の場合

「乃公」[3]という漢字表記は「だいこう」と読んで、「わがはい」の意の漢語的表現であり、男子が自分自信を尊大にいうときに使用される語である。

3.2.1 振り仮名「わたし」

(12)『お前ばかりぢゃない、乃公(わたし)にも関係のある事でな、良面倒(やゝめんだう)な事件が起つたのぢや』(p.250下、日頭→融)

(13)『それは乃公(わたし)が説明します』(p.279上、高嶺→時子/富美子)

(14)「何か乃公(わたし)に御疑念を有(も)つて居られるやうなお言(ことば)ぢやが、貴老(あなた)は何か思ひ違ひをして居られますな。何故(なぜ)と言つて、乃公(わたし)は今始めて此記事を読んで、誠に心外に思って居るんで……(後略)』(p.316上、日頭→橋見翁)

(15)『植村君は洋行中ぢやつたの？むゝ彼(あれ)あ仲々愉快な男ぢや……貴女(あんた)の些(ち)と乃公(わたし)邸(とこ)に来なさるが可(い)いぞ』(p.283上、某伯(なにがしはく)→俊子)

用例(12)では主人公の恩師で政務次官の日頭が主人公の融に対して使用している。用例(13)では県知事で日頭の片腕でもある高嶺が後に妻となる時子と日頭の娘の富美子に向

3)「乃」の漢字はなんじ(なんぢ)と読み、第二人称の代名詞。汝(なんじ)と同じ。

かって自分のことを「乃公」と言っている。用例(14)は日頭が自分よりも年上の橋見翁に対して、「貴老」と共起し「御疑念」「お言」「居られる」などの敬意表現が使用されている。用例(15)は内務大臣の某伯が初対面の俊子に対して「乃公」と言っている。

これらの用例から「乃公」という漢字表記を使用する人物は男性であり、ある程度の年配であることが共通している。用例(12)(14)の日頭は誰に対してもこの「乃公」の漢字表記の一人称が用いられているが、用例(13)の高嶺という男は他の場面では自分のことを「我輩」とも言っており、ここでは相手が女性で年下であるため「乃公」という漢字表記に「わたし」という振り仮名を用いたと考えられる。また相手によって敬意の表現を伴って、待遇価値を現していることが分かる。

3.2.2 振り仮名「わし」

次に「わし」という振り仮名を見てみる。

(16)『然うとも、**乃公**は土塊で圓めたやうな娘に、珠玉のやうな婿殿を有たせたから、大手柄をしましたぢや。はツはゝゝ』(p.264上、橋見翁(義父)→融(婿))

(17)『日頭さん生意気を言はつしやるな、**乃公**に較べりや貴下なんかは未だへ、青年ぢや、』(p.266下、橋見翁→日頭)

(18)『然う悦んで貰ふと**乃公**も愉快ぢや……何誰ぢやつたか遂ひ見忘れましたがな、はツはゝ、年を老ると何うも記憶が悪くなつての』(p.282下、某伯→美津子)

(19)『(前略)所詮**乃公**の罪……いや我から不孝の子に育て上げて、而して今其等の為に泣かされて居るのぢやからな。それに就けても**乃公**は然う思ふ……何程眼が昏んで居つたからと言つて、彼様な淫奔者をお前に押附やうとしたのが、今更愧かしくてならん……(後略)』(p.361下、日頭→融)

用例(16)(17)では、女性の主人公俊子の父親が「わし」と言っており、「乃公」という漢字表記とともに七十歳という年齢を表していると言えよう。この「わし」は橋見翁という特定の

話者の場合と用例(18)の内務大臣の某伯というの人物、用例(19)の日頭の一度以外には使用されていない。橋見翁の「わし」は相手に関係なく常に用いられているが、用例(18)では俊子の友人の美津子に対しては「わし」であり、一緒にいた俊子に対しては、この会話のすぐあとに先述の用例(15)のように「わたし」が使われている。これは俊子とは初対面であるが、美津子とは以前に面識があるという気持ちからの使い分けであると思われる。また用例(19)では日頭の同じ発話の中でほとんどは「わたし」を用いているが一度だけ「わし」が現れている。ここでの「わし」は相手の融にではなく、独り言に近いように語られた部分であると思われ、より私的な状況による選択が行われたことになる。ここから漢字表記は「乃公」と同じでも相手による「わし」と「わたし」の使い分けや状況による選択が見られる。

3.2.3 振り仮名「おれ」

(20)『それは面白(おもしろ)かつたらう、乃公(おれ)は音楽の趣味なんぞ解(わか)りはせんから、まあ御免蒙(ごめんかうむ)りたいが……』(p.252下、日頭(父)→富美子(娘))

(21)『それで何だらう、費用(ものいり)が嵩(かさ)むもんだから牢(らう)の中に居る乃公(おれ)に、金銭(かね)の才覚を為(さ)せに来たのだらう』(p.328下、高嶺(夫)→時子(妻))

用例(20)では日頭が娘に対して「おれ」と言っているのが見られる。用例(21)では高嶺が妻である時子に対して「おれ」と言っており、夫婦になる前には使われていない。「おれ」に関して房(2010:212)で「中年以上の男性の場合は夫婦関係のような身内の家族に対してかなり気軽に用いている」に該当すると言える。近藤(2001)の「オレ」の用字法の調査では「明治全期を通して見ると、＜己・乃公＞の二表記が多い」としているように、この作品では「おれ」にはこの「乃公」の漢字表記だけ現れている。

以上、「乃公」という漢字表記には振り仮名として「わたし」「わし」「おれ」の3種の語形が使用されており、多語一表記であることが分かる。「乃公」という漢字表記は話者がある程度年配の男性という限られた人物にしか使用されていない。振り仮名「わたし」は相手によって敬意の表現が伴い、「わし」はこの作品の中では特定の人物にだけ使用され、「おれ」は話し手の娘や妻というような最も近い相手に使用されていることが分かる。

4. 二人称「あなた」の漢字表記と待遇表現

次に『女夫波』の中の二人称代名詞の「あなた」には「所天」「貴女」「貴下」「貴方」「姉上」「岳父」「貴老」「先生」「父上」のような多様な漢字の使用法が見られ、一語多表記4)となっている。そこで、漢字表記の違いによってその述語にあたる部分にはどのような待遇表現が現れているかを考察してみる。

4.1 漢字表記「所天」の場合

「あなた」に「所天」という漢字表記が使用されている。「所天」は「しょてん」と読んで「天として仰ぎいただく所の意」として尊敬する人の称であり、人民から君主、子から親、妻から夫を指していう語だが、ここでは、妻が夫のことを呼ぶときにだけに限定して使用されている漢字表記である。

まず、主人公の夫婦である妻の俊子が夫の融に対しての会話を見てみる。

(22)『ですから私(わたし)は及ぶ丈(だ)け所天(あなた)のお力になりたいと……』(俊子(妻)→融(夫) p.243上)

(23)『所天(あなた)、未だ室内(うち)にお入りになりませんか』(俊子(妻)→融(夫) p.256上)

(24)『所天(あなた)如何(どう)なすつたのですか』(俊子(妻)→融(夫) p.243下)

俊子が夫に対する呼称には必ず、「あなた」の漢字表記に「所天」が使用されており、その述語部分には、用例(22)では「お力になりたい」と「お~する」謙譲表現、用例(23)では「お入りになりませんか」と「お＋連用形＋になる」の主体尊敬語が使用されている。また、用例(24)では「どうなすったのですか」と「なさる(＝する)」の特定形の尊敬語が使用され、いずれも敬語表現がなされている。

(25)『所天(あなた)、彼方(あっち)へ被行(いら)してくださいませんか』(美津子(妻)→樟山(夫) p.303上)

---

4)「一語多表記」とは、李(2004:222)が「一つの振りがな(語形)に複数の漢字表記をもつ表記」として使用した用語である。

(26)『其事なら植村様がお帰りになってから、所天直接にお頼み遊ばせ。其時には私尽力致しますわ、(後略)』(美津子(妻)→樟山(夫) p.303上)

次に用例(25)の俊子の友人美津子が自分の夫に対しての会話で「いらしてください」(いらっしゃってください)の「いらっしゃる」、用例(26)では「遊ばす」という「遊ぶ」の尊敬語が使用されている。同じ発話中に「尽力致します」という「する」の謙譲語の「いたす」が使われ、夫に対する敬意の表現が強調されているのがみられる。

(27)『所天は如何して其様な酷いことを仰在るのです』(時子(妻)→高嶺(夫) p.328下)

主人公融の姉の時子と高嶺の関係においても、まだ夫婦になっていない時期には、時子は高嶺のことを呼ぶとき「あなた」の漢字表記は「貴下」が使用されているが(用例(30)を参照)、夫婦になってからの「あなた」には「所天」の漢字が使用され、用例(27)のように「おっしゃる」という「言う」の尊敬語と共に表現されている。

4.2 漢字表記『貴下』の場合

次に「あなた」に「貴下」という漢字表記を使用している例を見てみる。

(28)『鷹山さん何ですねえ、貴下逃げるなんで御卑怯ですよ』(富美子(女)→鷹山(男) p.276上)

(29)『貴下ばかり不思議でないと仰在っても、私には不思議としか見えませんもの……何故って貴下のような猛烈な人が、奥様ばかりに優しく為さる理屈がないぢやありませんか』(富美子(女)→高嶺(男) p.277下)

(30)『はい、私假りに貴下と何する事になりましても、弟が必と妨害するんでせうし、其様な事から若しか貴下の感情を悪くお為せ申しては、(後略)』(時子(後の妻)→高嶺(後の夫) p.277下)

用例(28)では、女性の富美子から男性の鷹山には「貴下」という漢字表記が使用され、用例(29)でも富美子から男性の高嶺に対しても使用され、用例(30)でも女性の時子から男性の

高嶺に対しては「貴下」が使われている。待遇表現については用例(28)は「御卑怯」のように「ご」の接頭語で尊敬を表し、用例(8)の「おっしゃる」「なさる」の特定形の尊敬語が使用されている。用例(30)では「おさせ申す」という謙譲表現で相手に対する敬意を表し、「感情」というの漢字の振り仮名を「おこころもち」と振り、「お」の接頭語からも敬意が見られる。また用例(29)でも「人」という漢字に「かた」と振り仮名を付けて敬意表現がなされているのも興味深い。

(31)『日頭さん生意気を言はつしやるな、乃公(わし)に較(くら)べりや**貴下**(あんた)なんかは未だへ、青年(こども)ぢや、』(橋見翁→日頭 p.266下)

なお、用例(31)では同じ「貴下」の漢字表記ではあるが、「あなた」ではなく、「あんた」という振り仮名が付けられている。話し手は女主人公の父親であり、同じ男性である主人公の恩師で政務次官の日頭(ひかみ)に対しても「貴下」の漢字を使用しながら、振り仮名で年上の者から年下の者へという内容を表現している。一応敬意の表現は「言はつしやる」に見られる。

4.3 漢字表記「貴女」の場合

前節の「貴下」の漢字表記が男性に使用されているのに対して、この「貴女」の漢字表記は女性に対してだけ使用されるというはっきりとした使い分けが見られる。

(32)『俊子さん、**貴女**(あなた)何か考えて居て？』

俊子は打微笑んで、『**貴女**(あなた)こそ何か思つているでせう』(美津子(友人)↔俊子(友人) p.283下)

(33)『如何(どう)云う御経歴のお方だか、若(も)し**貴女**(あなた)御存知なら、お聞かせなすつて下さいませんか……』(時子(女)→富美子(女) p.277上)

(34)『**貴女**(あなた)まで其様(そん)な事を仰在(おつしや)るですか、**貴女**(あなた)にまで其様(そん)な者と見られちや、私実に詰らんですなあ』(鷹山(男)→富美子(女) p.276上下)

用例(32)は、女性同士でお互いに相手に対して「貴女」という漢字表記が使われている。

この例の他にも女性同士の会話の中では「貴女」の漢字表記が最も多く使用されている。待遇表現については、用例(32)では女同士の友人関係であるため、ここでは特別な敬意表現は見られない。用例(33)は同じ女同士の会話ではあるが、話し手の時子にとっては富美子は恩人の娘であるので、令嬢に対する敬意の表現が「御存知」や「お聞かせなさる」に現れている。また用例(34)は話し手が鷹山という男性であり、女性の富美子に対して「貴女」が使用されている。ここでは「おっしゃる」という特定形の敬語が使用されてはいるが、単独の使用であり同じ発話の中の他の述語には敬意表現はなされていないことが分かる。

4.4 漢字表記「貴方」の場合

(35)『**貴方**(あなた)も御無事で何より嬉しく存じます。(後略)』(融(婿)→橋見翁(義父) p.343下)

(36)『(前略)折角(せつかく)**貴方**(あなた)を思つて言つているのに、其様(そん)な隔意(へだて)を措(お)かなくたつて可(い)いぢやありませんか』(時子(姉)→融(弟) p.254下)

「貴方」の漢字表記は現代においても「あなた」に対する表記ではあるが、この作品の中ではこの表記はわずか数回しか使用されていない。用例(35)は、婿にあたる融が義父に対して「貴方」の漢字表記が使用されており、「御無事」で敬意を表し、述語でも「存じます」という謙譲語が使用され敬意表現がなされている。しかし用例(36)の「貴方」は姉の時子から弟の融に対して使われ、特別な敬意の表現は現れていない。

4.5 その他の漢字表記の場合

次に特定の相手に使用される「あなた」に対する漢字表記を見てみよう。

(37)『何時(いつ)でしたか忘れましたが、私(わたくし)**岳父**(あなた)の御面前で誓った事がありました。「私は決して官途には就かん、学問を以て身を立てます」と申し上げると、**岳父**(あなた)も五斗米(とべい)の為に膝を折るな……と仰在(おつしや)つて、色々励(はげ)まして下すつた事があつたですな』(融(婿)→橋見翁(義父) p.262下)

用例(37)では婿の融が自分の妻の父親に向かって「岳父」を使っている。「岳」の漢字には

「高山にも似た尊敬すべきもの」の意があり、「岳父」は「がくふ」と読んで、「妻の父」の意味である。ここでは、「御面前」や「おっしゃる」「くださる」の尊敬語とともに「申し上げる」という謙譲語が使用され、敬意の表現が十分に現れている。

(38)『併し姉さん、姉上(あなた)が余り官吏を尊び過ぎる点丈けは僕全く面白くないと思ふですよ』(融(弟)→時子(姉) p.254下)

(39)『姉が弟の許(もと)に帰って来るのに、何遠慮が要(い)るものですか、また**姉上(あなた)**が僕の身を思つて下さるのも、僕大いに感謝して居るのです、だが只一つ(たったひと)**姉上(あなた)**の仰せ(おほ)に反(そむ)かなきやならん、と云ふのは(後略)』(融(弟)→時子(姉) p.255下)

用例(38)(39)は弟が姉に対して「姉上」の漢字表記を使用している。用例(38)では敬語表現は使用されていないが、用例(39)では同じ姉の対してでも「下さる」の尊敬語や「仰せ」という語を使って敬意の表現がなされている。

(40)『真個(ほんたう)ですわねえ、**貴老(あなた)**のやうに御壮健(おたつしや)では百歳(ひやく)も二百歳(にひやく)も生きられませうよ』(時子→橋見翁 p.266下)

(41)『では萬一**貴老(あなた)**に失言(そゝう)のあった場合にや、**貴老(あなた)**は如何(どう)なさるお意(つもり)ぢや』(日頭→橋見翁 p.316下)

用例(40)(41)では「貴老」の漢字表記から、相手が年齢を召した者であることが分かる。この「貴老」の漢字表記は俊子の父親の橋見翁に対し限定して使用されている。待遇表現については、用例(40)は時子が橋見翁(弟の妻の父親)に対して一応「御壮健」と敬意は示してはいるが、述語においては敬意表現は現れていない。同じく用例(41)でも日頭が橋見翁に対して「お意」と敬意は示していても敬語動詞は使われていない。

(42)『失礼な事を言ひやうですが政界に望みをお絶ちなすつたには、**先生(あなた)**の為には却(かへ)つて幸福と云うものです。温かな家庭の和楽(わらく)と云うものは、十分先生をお慰め申す事が出来ますからな』(融→日頭 p.361上)

また用例(42)では「先生」の漢字表記にわざわざ「あなた」の振り仮名を付けることによって、話者がアドバイス的な内容を相手に伝えるために「あなた」を使用しながらも、関係においては師弟の関係であることを表現していると言える。ここでは「お絶ちなさる」という敬語表現、「お慰め申す」という謙譲表現から敬意の深さを表している。

(43)『言ふに忍びません、父上(あなた)も新聞紙(しんぶん)を御覧なさい』(英夫(息子)→翁(父) p.310下)

用例(43)では俊子の弟の英夫が自分の父親に対して「あなた」と言い、「父上」という漢字表記が使用されており、「御覧なさい」という敬語表現とともに父親に対する尊敬の意が読者にも伝わる表現であると言えよう。

このように特定の相手に使用された「あなた」においては、漢字表記が話し手と相手の人間関係や地位関係を明確に表現する役割を果たしていることが分かる。そして述語における敬意表現によって、相手の人物との関係の深さや尊敬の程度の違いを表していると言える。

5. おわりに

本稿では明治期後半の作品『女夫波』の人称代名詞の漢字表記と振り仮名の関係について、待遇表現を通して考察を行った。

まず、一人称代名詞について考察した結果は次の通りである。

(1)「わたし」の漢字表記には「私」「乃公」の二字が使用されており、「私」には「わたし」の他に「わたくし」「あたし」の三種の語形が見られ、「乃公」には「わたし」の他に「わし」「おれ」の三種の語形が見られた。

(2)「私」の漢字表記は性別の区別なしに使用されるが、「乃公」は年配の男性のみに使用されていることから、漢字表記の違いは話者の性別や年齢を現していると言える。

(3)振り仮名は相手との関係の深さからくる敬意の程度、すなわち待遇価値を現していると同時に「私」の振り仮名「わたし」と「わたくし」、「乃公」の振り仮名「わたし」と「わし」のように、会話の場面や状況によって選択されることも確認できた。また「乃公」の振り仮名「わし」に関しては特定の人物だけに使用され、待遇関係の影響が見られないことから、漢字表

記と振り仮名を固定することにより、その話者を特定化する用法であるとも言える。

次に二人称代名詞の「あなた」に対する漢字表記とその待遇表現との関係について考察した結果は次の通りである。

(4)「あなた」には「所天」「貴女」「貴下」「貴方」「姉上」「岳父」「貴老」「先生」「父上」のような九種の多様な漢字の使用法が見られ、一語多表記であると言える。

(5)「所天」は「夫」に対して、「貴下」は「男性」に対して普遍的に使用されており、その待遇表現においても敬意表現が絶対的である。「貴女」は「女性」に対して使用され普遍的ではあるが、その待遇表現においては敬意表現が立場によって相対的である。

(6)「岳父」「貴老」「先生」「父上」の漢字においては特定の人物だけに使用され限定的であると同時に、その待遇表現も程度の差はあるが絶対的である。このような特定の相手に使用された「あなた」においては、漢字表記が話者と相手の人間関係や地位関係を明確に表現する役割を果たしており、述語における敬意表現によって、相手の人物との関係の深さや尊敬の程度の違いを表していることが分かる。

このような人称代名詞の性別や年齢、身分などを明確に表現した文章の特徴から、当時の男性中心の階級社会の一面がうかがえ、女性読者を対象とした小説であるがゆえに、啓蒙的な役割をも果たしていたのではないかと考えられる。

今回は一作品のみの考察であったが、今後さらに他の作品を通しても考察を行っていきたいと考える。

【参考文献】

송세련(2011)「明治期 1･2인칭대명사의 대우가치」『일본어교육』제58집, 한국일본어교육학회
房極哲(2010)『近代日本語の待遇表現の研究―社会言語学的な観点から―』제이앤씨
李京珪(2004)「명치기 번역소설에 나타나는 한자표기와 후리가나에 관한 연구-内田魯庵訳『小説罪と罰』의人稱詞를 중심으로-」『日本学報』第61輯1巻, 韓国日本学会
岩淵匡(1989)「振り仮名の役割」『講座日本語と日本語教育9 日本語の文字･表記(下)』明治書院
近藤瑞子(2001)『近代日本語における用字法の変遷―尾崎紅葉を中心に―』翰林書房
進藤咲子(1982)「ふりがなの機能と変遷」『講座日本語学6 現代表記との史的対照』明治書院
飛田良文(1992)『東京語成立史の研究』東京堂出版
細川英雄(1989)「振り仮名―近代を中心に―」『漢字講座4 漢字と仮名』明治書院
森岡健二(1983)「明治期のおける漢字の役割」『言語生活』6月号, 筑摩書房
_____(1991)『改訂近代語の成立』明治書院
山田俊雄(1997)「漢字、かな、ルビ」『言語生活』7月号, 筑摩書房

[資料]
瀬沼茂樹編(1969)『明治文学全集93 明治家庭小説集』筑摩書房

논문투고일 : 2013년 09월 10일
심사개시일 : 2013년 09월 20일
1차 수정일 : 2113년 10월 09일
2차 수정일 : 2013년 10월 16일
게재확정일 : 2013년 10월 21일

<要旨>

明治期の人称代名詞の表記と待遇価値との相関関係の考察

－家庭小説『女夫波』を中心に－

本稿では明治期後半の作品『女夫波』の人称代名詞の漢字表記と振り仮名の関係について、待遇表現を通して考察を行った。

(1)一人称代名詞「わたし」の漢字表記には「私」「乃公」の二字が使用されており、「私」には「わたし」の他に「わたくし」「あたし」の三種の語形が見られ、「乃公」には「わたし」の他に「わし」「おれ」の三種の語形が見られた。

(2)「私」の漢字表記は性別の区別なしに使用されるが、「乃公」は年配の男性のみに使用されていることから、漢字表記の違いは話者の性別や年齢を現していると言える。

(3)振り仮名は相手との関係の深さからくる敬意の程度、すなわち待遇価値を現していると同時に「私」の振り仮名「わたし」と「わたくし」、「乃公」の振り仮名「わたし」と「わし」のように、会話の場面や状況によって選択されることも確認できた。

(4)二人称代名詞の「あなた」には「所天」「貴女」「貴下」「貴方」「姉上」「岳父」「貴老」「先生」「父上」のような九種の多様な漢字の使用法が見られ、一語多表記である。

(5)「所天」は「夫」に対して、「貴下」は「男性」に対して普遍的に使用されており、その待遇表現においても敬意表現が絶対的である。「貴女」は「女性」に対して使用され普遍的ではあるが、その待遇表現においては敬意表現が立場によって相対的である。

(6)「岳父」「貴老」「先生」「父上」の漢字においては特定の人物だけに使用され限定的であると同時に、その待遇表現も程度の差はあるが絶対的である。このような特定の相手に使用された「あなた」においては、漢字表記が話者と相手の人間関係や地位関係を明確に表現する役割を果たしており、述語における敬意表現によって、相手の人物との関係の深さや尊敬の程度の違いを表していることが分かる。

Correlations between Spelling of Personal Pronoun and "Quality of Courtesy/Treatment" in the Meiji Period

The Meiji period is when not only has a new form of Chinese characters been massively produced through translation of foreign languages in, and substantially ushered into, Japan since its opening to outside worlds. It is also historically perceived by many as a transitional period in the overall language system in Japan.In this sense, the change in"expression of courtesy/treatment" is one of the exemplary elements that have emerged in this transitional period, during which diverse forms of Chinese characters-based expression unprecedented in modern Japanese language system have also been on the surface.

Of various ways of linguistic expression that have emerged in the Meiji period, this research has particularly explored correlations between spelling of Chinese characters and that of furigana, centering upon their respective manners of expressing courtesy/treatment. Furthermore, it has scrutinized more in-depth the diversity in spelling of Chinese characters that is widely perceived as an important factor helping better understand the overall system of spelling languages in the Meiji period. This research has paid its particular attention to the primary reason behind the emergence (and then comprehensive proliferation) of diverse forms of spelling Chinese characters in Japan, especially in the Meiji period, together with the way in which they could be broadly used.